

かがみ

目次

開催にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
含水居藏鏡について・・・・・・・・・・・・・・・・	1
銅鏡の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
第1章 含水居藏鏡－戦国鏡－・・・・・・・・	3
第2章 含水居藏鏡－前漢鏡－・・・・・・・・	7
第3章 含水居藏鏡－後漢鏡－・・・・・・・・	11
第4章 含水居藏鏡－唐式鏡－・・・・・・・・	19
第5章 含水居藏鏡－その他－・・・・・・・・	23
第6章 富雄丸山古墳出土鏡と関連資料・・	25
第7章 平城京跡出土鏡・・・・・・・・・・	29
展示目録・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32

例言

1. 本書は、令和7年11月4日～12月26日まで開催する、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センターの令和7年度秋季特別展「かがみ－含水居藏鏡と銅鏡史－」の展示パンフレットです。
2. パンフレットは、奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター職員協力のもと、村瀬陸が編集しました。
3. 含水居藏鏡は、所蔵者である大伴由美子氏より調査研究・展示公開を目的としてご寄託いただきました。本特別展は、その成果の一部となります。記して心より感謝申し上げます。
4. 展示や本書の作成には、下記の機関・関係者の協力を得ました。記して心より感謝申し上げます（敬称略・50音順）。
飛鳥資料館 東大寺 東大寺ミュージアム 奈良県立橿原考古学研究所 奈良文化財研究所
岩本崇 岡村秀典 佐藤右文 實盛良彦 杉山洋 辻田淳一郎 堀永伸哉 馬淵一輝

開催にあたって

奈良市内には、佐紀古墳群をはじめとして多くの古墳が知られていますが、学術調査が制限される陵墓や平城京造営で破壊されたものが多数を占めています。そのため、副葬品の明らかな古墳となるところはごくわずかであり、奈良市教育委員会で保管する古墳時代の銅鏡は、弥勒寺より寄託を受けた三角縁神獣鏡1面があるのみでした。

しかし、2018年度より実施した富雄丸山古墳の発掘調査では、比類のない龍文盾形銅鏡をはじめとして5面の銅鏡が出土しました。さらに、時を同じくして奈良市在住の伴由美子氏より、コレクション資料である「含水居藏鏡」を寄託いただけることになりました。このように、奈良市と銅鏡の機運が急激に高まったことは、これを学ぶ上で喜ばしいことであり、その最初の一步として本特別展を企画しました。これを通じて、銅鏡に関心を持っていただく機会とすること、また富雄丸山古墳出土鏡について共に考えを深めていく機会となれば幸いです。

含水居藏鏡について

含水居藏鏡は、元帝塚山大学短期大学部名誉教授の（故）伴公馬氏が蒐集された中国鏡コレクションです。氏の雅号「含水居（がんすいきょ）」にちなみ含水居藏鏡と呼ばれています。本鏡群は、これまで奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『唐草文の世界』（1987年）、五條文化博物館『西域への憧憬 海獣葡萄鏡文様に見る唐文化の世界性』（1996年）、飛鳥資料館『鏡を作る。海獣葡萄鏡を中心として』（1999年）において、主に海獣葡萄鏡を中心として展示されてきました。また、2002年には杉山洋氏により、本鏡群のなかの唐式鏡のみをまとめた『含水居藏鏡図録』が刊行されました。本鏡群のなかには、高松塚古墳出土鏡や小治田安萬侶墓出土鏡などの同型鏡をはじめ、多数の同型鏡が収蔵されており、同型鏡研究を進める上での学術的価値が非常に高く評価されてきました。

一方、『含水居藏鏡図録』によると、本鏡群は図録に掲載された唐式鏡79面のほか、方格規矩鏡や西文帯神獣鏡など55面が収蔵されていると明記されていますが、その詳細はこれまで不明でした。ところが、2023年に富雄丸山古墳出土龍文盾形銅鏡のニュースがきっかけとなり、伴公馬氏の夫人である伴由美子氏とご縁をいただき、ご自宅に銅鏡コレクションがあると伺いしたためお邪魔したところ、コレクションが含水居藏鏡であることが判明しました。

その後、数回の調査を経て合計138面を確認し、本鏡群の全容を把握することができました。これまで、海獣葡萄鏡を中心とする唐式鏡のコレクションとして著名でしたが、殷・戦国～漢・宋鏡など、通時的な銅鏡コレクションであることが判明し、銅鏡の歴史を学ぶ上でも学術的意義の高い資料群であることがわかりました。このことから、2025年4月16日付で伴由美子氏から奈良市教育委員会へ、調査研究を目的とした一括での寄託をいただきました。

含水居藏鏡は、杉山洋氏が整理された際の台帳番号があります。これに基づくと、原則として1～79が唐式鏡（66は1・2が存在、66-2は『含水居藏鏡図録』未掲載）、80・81が殷鏡、82～92が戦国鏡、93～106が前漢鏡、107～122が後漢鏡、123～137が宋鏡等であり、杉山氏が唐式鏡を中心としながらも時代順に分類されていることがわかります。ただし、銅鏡には製作された時代の幅があり、例えば主流となるのは戦国時代であっても、型式変化したものは前漢時代であるというようなものも存在します。含水居藏鏡にもそういった銅鏡が含まれますが、本特別展では原則主流となる時代のほうに含めて紹介し、注釈を入れるようにしました。また、紙幅の都合上、コレクションの全てを掲載できませんが、『含水居藏鏡図録』で未掲載であった殷・戦国・漢・宋鏡を中心として、漏れのないように展示・掲載することを目指しました。

本特別展は、含水居藏鏡を通して銅鏡そのものに親しんでいただくことを目的としているため、難しい解説は避け、それぞれの時代の銅鏡をご覧いただけるように努めました。銅鏡が初めての方、少し知っている方、専門の方のいずれもが資料と向き合うことで、なにかを得られることができれば幸いです。

銅鏡の歴史

銅鏡の歴史を学ぼうと、「いつ、どこで、どのようにして、銅鏡が作られはじめたのか」は、気になることです。しかし、「よくわからない」のが現状です。

成立期の銅鏡は、世界的に見ると大きく2種類に分けられます。ひとつが、中国を中心に成立したとされる円形で鏡背面に図像文様や鈕のあるもので、他方が古代オリエントに認められる柄鏡（持ち手のある銅鏡）です。紀元前2000年頃には西アジアにすでに確認されており、同じ頃のエジプトにある石棺の浮き彫りには柄鏡を持つ貴婦人も描かれています。一方、中国の銅鏡は、文献でみると戦国時代末期（紀元前300年頃）に鏡にかんする記述が初めて認められます。春秋・戦国時代にあたる墳墓からも銅鏡の出土事例が豊富にあります。しかし、これを遡る資料は少なく殷代（紀元前1600～1000年頃）とされる銅鏡が数面、また齊家文化期（紀元前2200～1600年頃）とされる銅鏡も見つかっています。このように、いつどこで作られはじめたのかは、さらなる調査研究が必要ですが、2種類の銅鏡が古代オリエントと中国のそれぞれで同じ頃に誕生し、普及していったようです。

その後、中国では漢代に銅鏡生産が盛行期を迎えます。前漢では、戦国時代に見られた装飾性が減少し、大量生産しやすいような基本構成（連弧文や星雲文など）が整ってきます。基本的にやや厚手の小型～中型鏡が多く、平縁であるものが中心となります。前漢末期～新代になると、大型鏡が生産されるようになります。なかでも、小型鏡が中心である魼龍文鏡では格差を付けた大型鏡が作られます。このほか、新たに方格規矩鏡などの中～大型鏡も生産がはじまり、後漢で最盛期となります。後漢では、画像鏡や神獸鏡が成立して、徐々にこれらに主体が変わっていきます。後漢末期には、これまで平縁であったものが斜縁となるものが登場し、三国時代にかけて縁の形状が大きく転換します。この現象とともに、同じ原型で複数の鋳型を作る同型（范）鏡技法も普及していきます。この動向は、銅鏡に求められるものが変化し、まさに産業化していく様子を反映しているといえます。この流れのなかで、日本で大量に出土する三角縁神獸鏡も生産されたと考えられています。

中国では、三国時代を境として銅鏡生産が低調になり、南北朝時代には同型鏡生産が認められますが、再び活気付くのは隋唐代です。海獸葡萄鏡をはじめ八花鏡なども主流を占め、鍍金や螺鈿といった装飾もみられるようになります。宋代にも湖州鏡などが盛行しますが、唐代のような盛行期が再び起こることはなく、元～明清代にかけて古代鏡の模倣や踏み返し鏡などが生産されました。

日本での銅鏡生産は、弥生時代の小型仿製鏡にはじまります。古墳時代になると、舶載鏡の図像文様をあわせ持つような銅鏡（魼龍鏡など）が独自に生産されます。これらの倭鏡は、大型鏡が多数作られ、舶載鏡とともに倭王権の重要な器物として流通したようです。倭鏡生産は古墳時代を通じて続きますが、徐々に衰退してきます。奈良時代になると、海獸葡萄鏡を模した小型鏡や、八花鏡などが生産されました。そして、中国では以後衰退傾向になりますが、日本では平安時代に和鏡が成立し、連絡と江戸時代まで続きます。



1 平行線文鏡



2 多層凸弦文鏡



第1章 含水居蔵鏡－戦国鏡－

戦国鏡が作られたのは、紀元前500～200年頃であり、日本で言えば弥生時代前～中期に相当する時代です。そのため、日本の遺跡から出土した事例はほとんどありません。戦国鏡に初めて積極的な関心を示して研究を進めたのは、銅鏡研究者として著名な富岡謙蔵氏による「蟠螭鏡考」(『古鏡の研究』1918年)であると言われています。その後、中国での出土事例が増加するとともに、これまで「先漢鏡」などといった扱いであった戦国鏡が、きちんと位置づけられるようになってきました。

戦国鏡の特徴は、(1)鏡体が薄いこと、(2)面が平直であること、(3)三稜の鈕があること、(4)高いヒ縁(斜縁)であること、(5)文様構成が主文と地文をあわせたものであること、が主にあげられます。特に、(3)や(5)は一目でわかりやすい特徴であり、戦国鏡を判断するのに有効です。

しかし、例えば次ページに掲載している蟠螭文鏡(4p 図4)は、通常の蟠螭文鏡が精緻な地文の後に主文を施すのに対して、主文を描いてから、その間を埋めるように地文を施しています。そのため、地文は非常に粗雑な印象を受けるものになっています。こういったものは、型式的には戦国時代の蟠螭文鏡であるものの、前漢期など後世にくだる可能性を示す特徴としても知られています。

含水居蔵鏡としては、11面の戦国鏡がコレクションされていますが、偏りなく蒐集されており、戦国鏡の全体像を把握しようとする意図が読み取れます。いずれも優品であり、織物状の付着物が認められるもの(4p 図4)などもあります。



3 四山字文鏡



4 蟠螭文鏡

5 透彫龍文鏡



6 細地禽獸文鏡



7 連弧蟠螭文鏡





8 蛭蝸画像文鏡



11 蛭蝸葉文鏡



9 葉文鏡



12 菱文鏡



10 細地連弧葉文鏡



13 細地禽獸文鏡



第2章 含水居蔵鏡—前漢鏡—

秦の滅亡後に混乱をおさめた劉邦は、漢高祖として紀元前202年に即位しました。前漢のなかでも第7代皇帝の武帝は、匈奴に対抗するため、かつて匈奴に破れて西方に逃れた大月氏との同盟を試みました。その際に派遣された張騫は、10年以上西域を旅して大月氏にたどり着きますが、同盟には至りませんでした。しかし、これにより漢と西域は文化交流が活発となり、その交易網はのちに「シルクロード」と呼ばれるようになります。

このような背景をもつ前漢期には、多くの文物が作られ流通しました。銅鏡は持ち運びに便利な貴重品であることから、活発に製作され流通しました。中国国内の流通にとどまらず、朝鮮半島や日本、そして中央アジアなどでも前漢鏡が複数出土していることは、漢代の歴史的背景を物語る証拠です。

前漢鏡のなかでも、比較的多くの出土がみられるのは異体字銘帯鏡です。銘文から「清白鏡」「昭明鏡」「日光鏡」などのように呼ばれることもあります。中国だけでなく、日本でも北部九州の弥生墓を中心として出土事例が知られています。続いて、龍文鏡も日本での出土事例が複数知られている前漢鏡です。通常は10cm程度の小型鏡ですが、富雄丸山古墳や平原1号墓で出土したような鈕座に四葉文や連珠文をもつ大型鏡があります。異体字銘帯鏡でも同様の大型鏡（8p 図15）が存在し、これらは通常のものとは作り分けられた特別な銅鏡である可能性があります。

含水居蔵鏡にも、これらの前漢鏡が満遍なく蒐集されています。このことから、戦国鏡のコレクションに続けて、蒐集者の広く銅鏡の様式を捉えようとする志向が読み取れます。蒐集者は海獣葡萄鏡の同型鏡などを多数コレクションしており、掲載した星雲文鏡も同型鏡のようにみえますが、わずかに細部が異なります。蒐集者が前漢鏡の同型鏡について関心を寄せていたであろうこともうかがえます。



14 星雲文鏡



15 異体字銘帶鏡



16 草葉文鏡



19 魑文鏡



17 星雲文鏡



20 異体字銘帶鏡



18 星雲文鏡



21 異体字銘帶鏡



22 異体字銘帶鏡



25 異体字銘帶鏡



23 異体字銘帶鏡



26 龍文鏡



24 異体字銘帶鏡



27 鳥文鏡



第3章

含水居藏鏡—後漢鏡—

前漢末期になると、王莽が皇帝の地位を奪って新王朝を建てました。紀元2～23年まで続きましたが、劉秀（光武帝）が再び漢王朝を復興しました。これ以降を一般に後漢と呼んでいます。洛陽に都を置いて安定的な政治経済が築かれていましたが、184年に黄巾の乱が発生して混乱が生じ、220年には曹操の子である曹丕が魏を建国して後漢が滅亡しました。なお、中国では前漢を西漢、後漢を東漢とも呼んでいます。

新～後漢では、方格規矩鏡や内行花文鏡が盛行し、爆発的に流通しました。また、後漢では画像鏡や神獸鏡、獸帯鏡など豊富な鏡式が成立しました。前漢に比べると、さらに多種多様な鏡式が生み出され、また鏡工の移動に伴う影響関係も著しくなります。さらに、これまで銅鏡は工芸品としての位置づけがなされ、シルクロードに代表される文化交流のなかでも貴重品として扱われてきましたが、後漢後半期になると倭をはじめとして需要が増加するためか、工業化が進みます。その最たるものが「同型鏡」の普及です。同型鏡はひとつの元となる鏡から複数の鋳型を作る、まさに「コピー品」の大量製造に適した製作技法です。この技法が後漢後半期以降に急増し、三国時代を代表する銅鏡である三角縁神獸鏡では、類を見ない同型鏡生産が行われていたことがわかっています。

含水居藏鏡では、優品の方格規矩鏡や内行花文鏡が認められるほか、華西系に位置づけられる可能性のある画文帯環状乳神獸鏡（16p 図36）や、中国の著名銅鏡コレクターである陳介祺蔵鏡に掲載された上方作盤龍鏡と同型鏡（17p 図38）が含まれます。これらはまさに後漢鏡を代表する優品として重要です。また、方格規矩鏡のなかには、銘文帯や鋸齒文、TLV字文の部分が光沢をもつ処理が施されたもの（14p 図32）が認められます。同様の処理が施されたものは比較的認められるものですが、こういった処置によって光沢を持たせているのかは不明確な点が多く、今後の研究課題となっています。



28 方格規矩鏡



29 方格規矩鏡



30 方格規矩鏡



31 方格規矩鏡



32 方格規矩鏡



33 内行花文鏡



34 細線式獸帶鏡 さいせんしきじゅうたいきょう



35 四獸鏡 しじゅうきょう



36 面文帯環状乳神獸鏡



37 三鳳鏡



38 上方作盤龍鏡



39 十二葉文鏡



40 方格規矩鏡

本鏡は、型式的には後漢鏡の特徴をもつ方格規矩鏡ですが、銘文が明らかに潰れてしまっています。また、内区の図像文様に鋭さがなく模糊としているなど不自然な点が多く認められます。



42 画文帯同向式神獸鏡

本鏡は、型式的な見た目に問題はありませんが、半円方格帯の半円上面などで鑄造不良が認められるほか、鈕孔内部がオーバーハングしているなど不自然な点が多く認められます。



41 浮彫式獸帶鏡

本鏡は、型式的には後漢鏡の特徴をもつ浮彫式獸帶鏡ですが、鈕孔が明らかに小さく、表面状態もテカリがあるなど不自然な点が多く認められます。



43 文字裝飾鏡

本鏡は、おそらく杉山分類の際に「位至三公」と読んで台帳番号が決められたと思われますが、「位三列口」とあり、縁の形状などから宋代以降とみられるものです。



第4章

含水居蔵鏡—唐式鏡—

唐は、618～907年まで続いた中国の王朝です。中央集権体制と広大な領土、そして東西交易を通じた国際性により、中国史上最も繁栄した王朝としても知られています。日本との関わりとして、最も聞き馴染みのあるのが「遣唐使」でしょう。遣唐使は飛鳥時代にあたる630年に派遣が始まり、阿倍仲麻呂や吉備真備、最澄・空海などが、唐のすべてを学ぶことを目的に派遣されたことは有名です。また、遣唐使により持ち帰られた品々は、正倉院に納められました。平安時代の894年に菅原道真の提案で廃止されるまで、唐だけでなく中央アジアなど西域の文物を日本にもたらしました。

銅鏡でみると、三国時代以降は生産が衰退しますが、唐代には再び銅鏡生産が盛期を迎えることになります。代表的なものには、海獣葡萄鏡があります。海獣葡萄鏡は、その名の通り「葡萄唐草文」を中心とする図像文様をもっています。ここには西域の影響を読み取ることができ、盛んになったシルクロード交易の影響をまさに表現した銅鏡といえます。中国でも多数の出土事例があり、日本でも奈良県高松塚古墳出土鏡は最も有名な海獣葡萄鏡として知られています。また、海獣葡萄鏡も多数の同型鏡があることがわかっています。

含水居蔵鏡は、これまで唐式鏡の非常に重要なコレクションとして知られてきたように、約80面の唐式鏡が蒐集されています。主体となるのは海獣葡萄鏡で、高松塚古墳の同型鏡(20p 図44)も含まれています。このほか、日光男体山遺跡(栃木)・白石古墳(群馬)・香取神宮(千葉)・八代神社(三重)・ユルベ浜遺跡(三重)・井出寺跡(京都)・大阪城三の丸遺跡(大阪)・松山古墳(奈良)・仙ノ内古墳(奈良)・小治田安万侶墓(奈良)・真名子古墳(福岡)・本庄古墳(宮崎)・神門神社(宮崎)などの銅鏡と同型鏡であるものが含まれています。また、貼金宝相華八弧鏡のような緻密な地文や金装飾を施したもの、方形を呈する海獣葡萄鏡など特異な銅鏡も所蔵されています。



44 かいじゅうぶどうきょう
海獸葡萄鏡
高松塚古墳出土鏡と同型



45 海獸葡萄鏡（高松塚古墳出土）
飛鳥資料館 2022『飛鳥美人』より転載

井出寺跡・香取神宮鏡と同型

46 海獸葡萄鏡



47 海獸葡萄鏡

杜ノ内古墓鏡と同型

小治田安萬侶墓鏡と同型

48 双麟双鳳鏡





49 方格四獸銘帶鏡



52 鍍金海獸葡萄鏡



50 走獸葡萄鏡



53 方形海獸葡萄鏡



51 海獸葡萄鏡



54 貼金寶相華八弧鏡



第5章 含水居藏鏡－その他－

唐の滅亡後、約50年にわたる五代十国時代を経て、960年に宋が建国されます。宋王朝は文治主義の国家であり、宋銭に代表されるような貨幣経済・商業の目まぐるしい発展を遂げました。日本では平安時代末期～鎌倉時代にあたり、日宋貿易により多くの文化が日本にももたらされました。

宋代の銅鏡として著名なのは、浙江省の湖州市で生産された「湖州鏡」です。湖州鏡は薄手で無文、素鈕といったシンプルな銅鏡ですが、高度な鑄造技術により製作されています。形も円形のほか八花などいくつか系統が存在します。また、鏡背面には店名などが鋳出されています。一方、宋代以降は銅鏡生産が唐式鏡のように再び盛行することはなく、模倣鏡などを中心として衰退していきます。

含水居藏鏡にも、このような湖州鏡が含まれています。さらに、これより時期がくだるとみられる鏤（こ）があしらわれた銅鏡なども蒐集されています。

通常の銅鏡コレクションでは、蒐集者の嗜好に合わせて時代や鏡式などの偏りがある場合が多くみられます。一方、含水居藏鏡は、確かに唐式鏡がコレクションの半数を占め、蒐集者の飽くなき熱意を感じるところですが、それにとどまらず、ここまでみてきた戦国・漢鏡などを万遍なく蒐集され、宋代の湖州鏡に至るまでその範囲は広く銅鏡史を通観するかのようなコレクションです。

1面1面の価値もさることながら、そういった蒐集者の意図を含めて「含水居藏鏡」は、銅鏡群としての価値を高く評価することができるものでしょう。そういった視点で、改めて含水居藏鏡をご覧いただければ、銅鏡の歴史とコレクションとしての重要性を合わせて感じることができると思います。



55



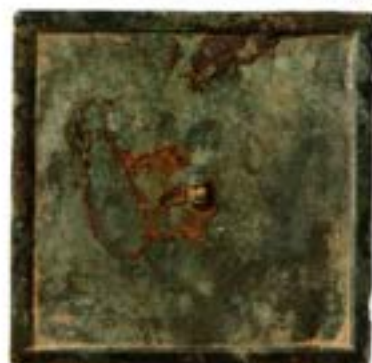
60



65



56



61



66



57



62



67



58



63



68



59



64



69

55～69 宋以降の銅鏡（各鏡式名は巻末の展示目録に記載）



第6章

富雄丸山古墳出土鏡と関連資料

富雄丸山古墳では、これまで（伝）富雄丸山古墳出土三角縁神獸鏡3面（天理参考館所蔵）が知られていました。しかし、これらが富雄丸山古墳で出土したかどうかは、今のところ定かではありません。しかし、2019年度に実施した富雄丸山古墳第3次調査にて、墳頂部埋葬施設の墓坑埋土から斜縁神獸鏡の破片1点が出土しました。さらに、2022年度の第6次調査では、造出し埋葬施設である粘土槨の被覆粘土中から巨大蛇行剣とともに龍文盾形銅鏡が出土しました。2023年度の第7次調査では、粘土槨に納められた木棺の内部から銅鏡3面も出土しました。

これらの出土鏡は、前漢期に盛行した龍文鏡、後漢期に盛行した画像鏡、後漢～三国時代に盛行した斜縁神獸鏡^{しやえんしんぶつこうきょう}、三国時代に盛行した三角縁神獸鏡、そして倭で4世紀に製作された龍文盾形銅鏡と、非常に多様性のある銅鏡群として注目することができます。本特別展が含水居蔵鏡をもとに、通史的な銅鏡の歴史を展示するに至ったのも、富雄丸山古墳出土鏡群がこのような特徴をもつことがわかったからです。

ここまで、通史的に銅鏡をご覧いただきましたが、それをふまえても富雄丸山古墳出土鏡群の意義を考えることは簡単ではありません。この課題に取り組むためには、着実な基礎調査・研究が必要となります。そのため、棺内出土3面のクリーニング作業は約1年間、龍文盾形銅鏡は現在進行形で奈良県立橿原考古学研究所にて実施しています。あらゆる情報を落とさないように注意しながら顕微鏡を用いて実施する作業は、まさに考古学・保存科学の両輪で進める最新の調査研究といえます。

本章では、着実に資料の実像が明らかとなる様子を、まずは高精細の写真でご覧いただき、あわせてデジタルマイクロスコープで見ることができる新たな視点を紹介します。



70 さんかくさくしんじゅう
三角縁神獣鏡
富雄丸山古墳造出し埋葬施設
棺内出土1号鏡



71 りゅうりょうもん
彫龍文鏡
富雄丸山古墳造出し埋葬施設
棺内出土2号鏡



72 ざいざう
画像鏡
富雄丸山古墳造出し埋葬施設
棺内出土3号鏡

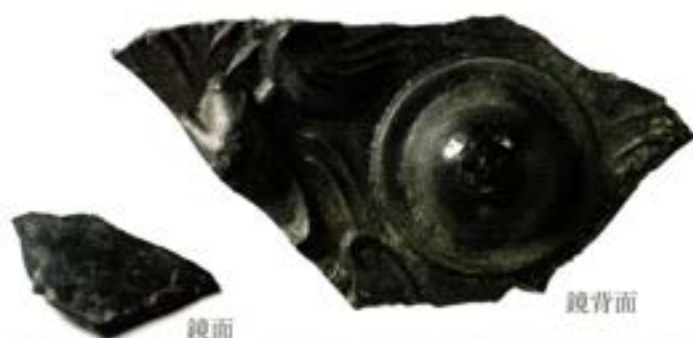


73 龍龍文盾形銅鏡（富雄丸山古墳造出し埋葬施設出土）

写真は、出土直後に撮影したクリーニング作業前のものです。鏡面は丁寧に研磨されており、鏡背面の中央には銅鏡特有の鈕がついています。また、鈕の上下には、倭でのみ製作された龍龍鏡の図像文様が描かれています。このことから、「龍龍文盾形銅鏡」と命名しました。

全長64cm、最大幅31cm、重さ5.7kgで、平面形の大きさとしては日本最大の銅鏡です。龍龍文部分は、初期の龍龍鏡に比べて文様が崩れており、概ね4世紀後半頃に製作されたものであることがわかります。富雄丸山古墳は、出土した埴輪などから4世紀後半に築造されたことがわかっているため、銅鏡が製作されてから比較的すぐに副葬されたものと考えられます。なお、鈕には織物状の付着物があることや、鏡面には泥を塗ったようにみえる痕跡が認められました。

このような銅鏡は、比類のないものであり、現在も丁寧なクリーニング作業が進行中です。唯一無二であるがために、どのような情報が引き出せるのか、今後の調査研究に求められます。



出土した斜縁神獸鏡の鏡面は、肉眼ではなにも付着していないように見えますが、デジタルマイクロスコープで観察すると、研磨の際についた擦痕や鑄造時の果（小さなくぼみ）のなかに、赤色顔料が入り込んでいました。

これを、奈良大学との連携協定に基づき、西山要一名誉教授に蛍光X線分析を実施していただいたところ、赤色顔料が酸化鉄（ベンガラ）であることがわかりました。鏡背面の赤色顔料も同様の顔料とみられます。

赤色顔料が入り込む擦痕は、研磨擦痕のなかでも重複関係で古い痕跡に伴うため、鑄造後の早い段階に赤色顔料を用いた研磨を行ったようです。赤色顔料を用いた銅鏡の研磨は奈良～江戸時代の記録にも認められるもので伝統的な技術として知られています。

鏡面の赤色顔料と研磨痕跡

74 斜縁神獸鏡（富雄丸山古墳墳頂部埋葬施設出土）



75 三角縁神獸鏡（弥勒寺所蔵、奈良市教育委員会保管：奈良市指定文化財）

富雄丸山古墳の近くに所在する弥勒寺には江戸時代から本鏡が伝わりますが、古墳との関係は不明です。



第7章 平城京跡出土鏡

日本では、銅鏡というと弥生～古墳時代を思い浮かべるでしょう。しかし、本特別展でもお示してきたように、奈良時代を前後する時代に、中国では唐式鏡が盛行します。実際に、正倉院宝物などにも唐式鏡が含まれています。

奈良時代の都城遺跡である平城京跡でも、複数の銅鏡が出土しています。しかし、興味深いことに伝世品にみられる優美な唐式鏡などはなく、基本的にはそれらを模した小型鏡が多数を占めます。そのなかでも、海獣葡萄鏡を模倣した小型海獣葡萄鏡は多数出土がみられます。小型海獣葡萄鏡は、祭祀遺跡を中心として出土事例が認められるもので、そのほとんど全てが同型鏡とされています。日本出土鏡は、かなり踏み返し鑄造が進んだものが多く、原型鏡に近い文様鮮明なものは今のところ知られていません。平城京跡で出土した各鏡も、文様が非常に不鮮明であることが見て取れます。

また、文様がなく鈕があることで、かろうじて銅鏡であると判断できるものも平城京跡では複数出土しています。非常に小さな銅鏡であるため、日常的に使用することは困難であり、こういった目的で利用されたものなのかは今後の検討課題です。

他方、注目できる出土品として、正倉院宝物や東大寺鎮壇具と同型鏡である瑞花六花鏡（唐花六花鏡とも呼ばれる）の破片があります。平城京跡出土品を含めて8例が知られています。この同型鏡のうち、正倉院宝物鏡は非常に優美であり、これにやや劣るものの東大寺鎮壇具鏡も比較的文様の鮮明な優品です。一方、平城京跡出土鏡は、これらに比べてさらに劣化したものであり、踏み返しの進んだ段階のものと判断できます。正倉院・東大寺鏡は造東大寺司鑄所での製作が想定されており、平城京跡出土鏡などは、当時の貨幣と同じように京内の私営工房などで製作されたものである可能性が指摘されています。

弥生～古墳時代の銅鏡研究は、多くの研究がある一方で、唐式鏡や奈良時代の銅鏡にかんする研究は比較的少ないのが現状です。平城京跡出土鏡は、これまで一括で公開されたことがなく、今回の特別展をきっかけに多くの方々に知っていただくことで、研究が進むことが期待されます。



76 唐花六花鏡（平城京跡出土）

77 瑞花六花鏡（東大寺金堂鎮壇具）
東大寺所蔵、奈良市教育委員会撮影

平城京跡出土鏡に比べて、東大寺鏡は図像文様が鮮明です。特に、地文の部分に注目すると、東大寺鏡には魚々子地^{うなぎこじ}が明瞭に観察できますが、平城京跡鏡では一部しか認められません。このことから、東大寺鏡などの精緻な鏡群のなかから、踏み返しを複数回行う作業を経て、平城京跡出土鏡のようなものが生み出されたと考えられます。両者の現物照合および三次元計測での比較検討の結果、文様の細部や微妙な凹凸の一致が確認でき、平城京跡鏡の破片は、東大寺鏡（図77）の12時方向部分に当たることがわかりました。

東大寺鏡の埋納時期は、天平勝宝8（756）年7月29日の銅座鑄了時、天平勝宝9（757）年5月2日の聖武太上天皇一周忌の時、天平宝字4（760）年6月7日の光明皇后崩御以降が想定されています。概ね、奈良時代中頃に製作された銅鏡であると考えられます。

平城京跡出土鏡は、左京四条四坊五坪で出土したものです。四条四坊といえば、太安萬侶^{すくもりのやすもろ}が住んでいたことを太安萬侶銅板墓誌からうかがい知ることができます。それよりも後の時期とみられるものですが、当該地に比較的高位な貴族が住んでいたことを示す資料になるかもしれません。



78 唐草双鳥文六花鏡



79 六花鏡



80～84 小型海獣葡萄鏡

主に奈良時代の祭祀遺跡などから出土します。平城京跡からも複数出土しており、80・81、82～84はそれぞれ同型鏡とみられます。踏み返しを繰り返していることから、文様が非常に不鮮明になっています。



85～90 無文鏡

91 花鳥文背円鏡

平城京跡の各地で出土しています。文様はありませんが、銅鏡に特有の「鈕」が表現されています。鏡としては小さすぎることもあり、祭祀用として用いられた可能性が高いものです。

平城京跡に重複する奈良町遺跡で、室町時代の土坑から出土した和鏡です。

展示目録

章	神田 番号	含水居 番号	鏡式名	直径*	重量	時期	所蔵	備考
序	1	80	平行線文鏡	8.6 cm	170 g	殷	含水居蔵鏡	
	2	81	多面凸弦文鏡	5.9 cm	48 g	殷	含水居蔵鏡	
第1章	3	83	四山字文鏡	11.0 cm	157 g	戦国	含水居蔵鏡	
	4	84	蟻螭文鏡	22.6 cm	500 g	戦国（前漢）	含水居蔵鏡	
	5	82	透形腹文鏡	6.2 cm	74 g	戦国	含水居蔵鏡	
	6	90	細地禽獸文鏡	9.6 cm	60 g	戦国	含水居蔵鏡	
	7	89	連弧蟻螭文鏡	16.6 cm	279 g	戦国	含水居蔵鏡	
	8	85	蟻螭面像文鏡	18.2 cm	417 g	戦国	含水居蔵鏡	
	9	86	葉文鏡	7.8 cm	52 g	戦国	含水居蔵鏡	
	10	87	細地連弧葉文鏡	8.8 cm	50 g	戦国	含水居蔵鏡	
	11	88	蟻螭葉文鏡	12.3 cm	93 g	戦国	含水居蔵鏡	
	12	91	菱文鏡	11.8 cm	118 g	戦国	含水居蔵鏡	
	13	92	細地禽獸文鏡	11.0 cm	98 g	戦国	含水居蔵鏡	
第2章	14	96	星雲文鏡	11.0 cm	246 g	前漢	含水居蔵鏡	
	15	104	異体字銘帯鏡	16.5 cm	482 g	前漢	含水居蔵鏡	
	16	93	草葉文鏡	13.6 cm	254 g	前漢	含水居蔵鏡	
	17	94	星雲文鏡	11.3 cm	225 g	前漢	含水居蔵鏡	
	18	95	星雲文鏡	10.0 cm	183 g	前漢	含水居蔵鏡	
	19	97	池龍文鏡	9.1 cm	55 g	前漢	含水居蔵鏡	
	20	98	異体字銘帯鏡	6.4 cm	39 g	前漢	含水居蔵鏡	
	21	99	異体字銘帯鏡	4.9 cm	25 g	前漢	含水居蔵鏡	
	22	100	異体字銘帯鏡	10.0 cm	222 g	前漢	含水居蔵鏡	
	23	101	異体字銘帯鏡	9.1 cm	172 g	前漢	含水居蔵鏡	
	24	102	異体字銘帯鏡	7.9 cm	85 g	前漢	含水居蔵鏡	
	25	103	異体字銘帯鏡	11.0 cm	158 g	前漢	含水居蔵鏡	
	26	105	池龍文鏡	11.4 cm	292 g	前漢	含水居蔵鏡	
	27	106	鳥文鏡	8.2 cm	93 g	前漢	含水居蔵鏡	
第3章	28	107	方格規矩鏡	20.1 cm	809 g	後漢	含水居蔵鏡	
	29	108	方格規矩鏡	14.1 cm	511 g	後漢	含水居蔵鏡	
	30	109	方格規矩鏡	16.5 cm	583 g	後漢	含水居蔵鏡	
	31	110	方格規矩鏡	13.9 cm	440 g	後漢	含水居蔵鏡	
	32	112	方格規矩鏡	13.7 cm	385 g	後漢	含水居蔵鏡	
	33	113	内行花文鏡	10.0 cm	115 g	後漢	含水居蔵鏡	
	34	114	細線式獸蹄鏡	18.9 cm	912 g	後漢	含水居蔵鏡	
	35	118	四獸鏡	9.7 cm	186 g	後漢	含水居蔵鏡	
	36	116	画文帯環状乳神獸鏡	12.8 cm	258 g	後漢	含水居蔵鏡	華西系か
	37	119	三鳳鏡	12.6 cm	264 g	後漢	含水居蔵鏡	
	38	120	上方作盤龍鏡	11.0 cm	296 g	後漢	含水居蔵鏡	陳合組蔵鏡と同型鏡
	39	121	十二葉文鏡	10.7 cm	154 g	後漢	含水居蔵鏡	上方作系か
	40	111	方格規矩鏡	15.6 cm	493 g	不明	含水居蔵鏡	模倣鏡か
	41	115	浮彫式獸蹄鏡	19.0 cm	865 g	不明	含水居蔵鏡	模倣鏡か
	42	117	画文帯同向式神獸鏡	15.0 cm	489 g	不明	含水居蔵鏡	模倣鏡か
	43	122	文字裝飾鏡	10.9 cm	106 g	宋以降	含水居蔵鏡	
第4章	44	32	海獸葡萄鏡	16.1 cm	1032 g	唐	含水居蔵鏡	同型鏡：高松塚古墳
	45	-	海獸葡萄鏡	16.8 cm	1220 g	飛鳥時代	文化庁所蔵、 飛鳥資料館保管	高松塚古墳出土。パネルのみ
	46	26	海獸葡萄鏡	13.7 cm	574 g	唐	含水居蔵鏡	同型鏡：京都井田寺跡、 千葉香取神社
	47	63	海獸葡萄鏡	11.7 cm	577 g	唐	含水居蔵鏡	同型鏡：奈良柚ノ内古墳
	48	72	双麟双鳳鏡	16.2 cm	611 g	唐	含水居蔵鏡	同型鏡：奈良小泊田安萬古墳
	49	1	方格四獸銘帯鏡	13.7 cm	295 g	唐	含水居蔵鏡	
	50	6	走獸葡萄鏡	11.6 cm	423 g	唐	含水居蔵鏡	
	51	14	海獸葡萄鏡	14.3 cm	447 g	唐	含水居蔵鏡	
	52	42	圓金海獸葡萄鏡	10.1 cm	289 g	唐	含水居蔵鏡	同型鏡：宮崎神門神社8号鏡
	53	54	方形海獸葡萄鏡	8.9 cm	406 g	唐	含水居蔵鏡	
	54	78	貼金宝相華八弧鏡	5.1 cm	58 g	唐	含水居蔵鏡	

第5章	55	123	六花鏡	16.6 cm	549 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	56	124	八花鏡	19.6 cm	939 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	57	125	素文鏡	9.8 cm	179 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	58	126	六花鏡	13.3 cm	334 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	59	127	亞字文鏡	9.9 cm	190 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	60	128	亞字文鏡	10.5 cm	112 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	61	129	方格素文鏡	11.9 cm	178 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	62	130	盾形文鏡	10.9 cm	107 g	宋	含水居藏鏡	湖州鏡
	63	131	素文鏡	8.1 cm	149 g	宋以降	含水居藏鏡	
	64	132	素文鏡	8.2 cm	186 g	宋以降	含水居藏鏡	
	65	133	双鱼鏡	8.7 cm	157 g	宋以降	含水居藏鏡	
	66	134	重圈文鏡	6.4 cm	38 g	宋以降	含水居藏鏡	
	67	135	長命貴富鏡	23.9 cm	813 g	宋以降	含水居藏鏡	
	68	136	方形花文鏡	17.8 cm	846 g	宋以降	含水居藏鏡	
	69	137	花文鏡	10.8 cm	57 g	宋以降	含水居藏鏡	
第6章	70	-	三角縁神獸鏡	21.6 cm	961 g	魏	奈良市教育委員会	富雄丸山古墳出土、 パネルのみ
	71	-	懸龍文鏡	19.1 cm	844 g	前漢	奈良市教育委員会	富雄丸山古墳出土、 パネルのみ
	72	-	画像鏡	19.6 cm	673 g	後漢～三国	奈良市教育委員会	富雄丸山古墳出土、 パネルのみ
	73	-	懸龍文盾形銅鏡	(64 × 31) cm	約 5700 g	古墳時代前期	奈良市教育委員会	富雄丸山古墳出土、 パネルのみ
	74	-	斜縁神獸鏡	3.0 cm	3 g	後漢～三国	奈良市教育委員会	富雄丸山古墳出土
	75	-	三角縁神獸鏡	21.7 cm	940 g	魏	奈良市教育委員会保管	勢多寺所蔵
第7章	76	-	唐花六花鏡（破片）	(4.0 × 2.7) cm	24 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ266 次出土
	77	-	瑞花六花鏡	9.3 cm	- g	奈良時代	東大寺	東大寺金堂遺構、 パネルのみ
	78	-	唐草双鳥文六稜鏡	9.5 cm	85 g	鎌倉時代?	奈良市教育委員会	HJ531 次出土
	79	-	六花鏡（破片）	(5.1 × 3.8) cm	31 g	平安時代	奈良市教育委員会	HJ482 次出土
	80	-	小型海獣葡萄鏡	4.7 cm	17 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ157 次出土
	81	-	小型海獣葡萄鏡	4.5 cm	11 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ207 次出土
	82	-	小型海獣葡萄鏡	3.8 cm	19 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ273 次出土
	83	-	小型海獣葡萄鏡	4.0 cm	17 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ208 次出土
	84	-	小型海獣葡萄鏡	3.9 cm	27 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ314 次出土
	85	-	無文鏡	(3.3) cm	3 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ283 次出土
	86	-	無文鏡	3.4 cm	9 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ284 次出土
	87	-	無文鏡	3.1 cm	5 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ292 次出土
	88	-	無文鏡	(2.2) cm	1 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ273 次出土
	89	-	無文鏡	2.9 cm	4 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ314 次出土
	90	-	無文鏡	(3.0) cm	3 g	奈良時代	奈良市教育委員会	HJ363 次出土
	91	-	花鳥文背円鏡	4.8 cm	24 g	鎌倉～室町時代	奈良市教育委員会	HJ258 次出土

※（ ）は直径ではなく長さ×幅、または円径

令和7年度秋季特別展

かがみ —含水居藏鏡と銅鏡史—

展示パンフレット

発行日：令和7年11月4日

編集：奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター

発行：奈良市教育委員会

印刷：株式会社 JITSUGYO

